

### III. 「心と口と行いと生きざまもて」

#### —— 少女美術における精神的なるもの

さまざまな文化における「巫女」の存在に象徴されるように、少女は精神的・超越的な世界と日常的・現世的な世界とを結びつける媒介としての役割を担って／担わされてきました。

そういった特殊な存在としての少女は、一種神懸かり的な混沌や躍動、律動というあらわれをとって描かれることがあります。それはたとえば O JUN の少女の跳躍、Mr. の絵画に描かれた多幸症的な賑わい、あるいは松山賢の少女絵画に執拗に現れる呪文のような文様のリズムのなかにうかがうことができるでしょう。

また、(ことの当否はさておき) 思春期の少女たちに特有のものと考えられることの多い、メランコリー(憂鬱や憂愁)を身近に感じる心性は、美術の世界でも独自の表現を生み出しています。

先述の混沌や躍動とは逆に、静謐で思索的なたたずまいの中に超越者とのつながりを実現する少女が描かれることもあります。たとえば藤野一友や吉岡正人、ob といった神の声を聴く少女の系譜を挙げることができるでしょう。

アニメや漫画で活躍する魔法少女はそういった存在のひとつの変容体とも言えます。日曜朝のお楽しみとして日本のアニメーション界で独自の展開を遂げたこのモチーフ、存外に深い意味を宿しているように思えてなりません。

さて、「美少女の美術史」静岡展の最後は、こちらを見据える少女たちです。今まで、いささか不躰な視線でじろじろと少女絵画を眺めてきた私たち。キャンバスの中からためらいなく見つめる少女たちの視線の放列に捕らえられ、最後に《カナリヤ》の女の子(実は彼女は人形です)と鏡の中の少女に見送られて会場を後にする不思議な感覚をお楽しみいただければ、まさに企画者冥利に尽きるというものです。

